第2章　中島敦文学と異郷としての朝鮮

第1節　中島敦の初期と浮遊する朝鮮人像

1　はじめに

中島敦の初期作品のうち、舞台が朝鮮で、朝鮮人が中心人物として登場する小説がいくつかある(1)。

「巡査の居る風景」　一九二九年六月　「校友会雑誌」に発表。

「プウルの傍で」　一九三二、三年頃執筆。

「虎狩」　一九三四年四月までに完稿。

また、唯一の未完成長編小説である「北方行」にも、舞台が中国で周辺的な人物ではあるが、抗日運動に関わっている朝鮮人青年が登場している。そして、これらの作品に登場する朝鮮人は、いずれも現実生活で安定できず、時代を浮遊する人物として描かれている。以下、個別の作品からその浮遊する朝鮮人の造形を探ってみよう。

2　「巡査の居る風景」

「巡査の居る風景」は、一九二九年六月、第一高等学校の『校友会雑誌』に「一九二三年の一つのスケッチ」という副題で発表されたものである。巡査の趙教英と大震災で夫を亡くした売春婦の金東蓮という二人の朝鮮人の目を通して叙述される作品は、植民地の現実を支配者の側からではなく、被支配者の視点から捉えられてある。そして、作品には、主人公の巡査と売春婦以外にも、学生、府会議員候補、抗日運動者、乞食などのさまざまな朝鮮人が登場しており、それらの人物を通して植民地の現実がより一層浮き彫りにされているかたちになっている。

まず、主人公である巡査の趙教英は、朝鮮人でありながらも支配者の側に立っている人物である。彼は自分の仕事と植民地の現実からさまざまな矛盾を感じてはいるが、その現実から目覚めるを恐れ、それを直視しようとはしない。しかし、巡査という職業柄もあって、否応なしにその現実と直面せざるをえなく、その過程で少しずつ自己意識を取りもどしていく。しかし、彼のこういう認識は植民地の巡査という現実構造のなかで、具体的な行動として現れることはない。植民地の現実に自覚はあるのの、そこから一歩踏み切っていくことはできない。

それからもう一度日本という国を考へて見た。朝鮮という民族を考へて見た。自分というものも考へて見た。更に、自分の職業を、それから、今そこに帰らうとして居る妻と一人の子供のことを思ひ浮かべた。

認識と現実の矛盾のなかで悩む彼の姿は、「何か忘れ物をした時に人が感じる」、「何所となく落ち着かない」態度として現れたり、朝鮮人としての「果されない義務の圧迫感」や「重苦しい圧力」を感じたりする。その心理的な圧迫感は朝鮮総督の暗殺を企てた朝鮮人青年を捕らえたとき、頂点に達する。

彼の腕を捕へて居た趙教英はとてもその目付きに堪へられなかつた。その犯人の眼は明らかにものを言つて居るのだ。教英は日頃感じて居る、あの圧迫感が二十倍もの重みで、自分を押しつけるのを感じた。

捕はれたものは誰だ。

捕えたものは誰だ。

しかし、趙教英の現実認識からくる度重なる圧迫感は、日本人学生と朝鮮人学生の喧嘩事件によって一つの転機をむかえることになる。喧嘩事件の懲戒をめぐって趙は日本人の課長と言い争ったため、免職になったからである。課長と言い争うこと自体が以前の趙には見られない行動的な一面といえる。多分、趙はその席で朝鮮人学生を弁護し、それが課長の機嫌を損ねて首になったのであろう。そして、免職をきっかけに、彼の今までの心理的な圧迫感から解放され、自分の現実認識に基づいた具体的な行動をとっていくことになる。

と、ふと彼は、彼の知つて居る裏通りのある二階屋の一室のことを思ひ浮べた。

其処には粗末な椅子が五六脚と、手製のテーブルが一つ置いてある。テーブルの上には蝋燭が二本立つて居る。蝋燭の光はそこに集まつた同士達の顔をおぼろげに照し出す。赤い顔をして卓を叩くもの。髪をかきむしつて考へて居るもの。黙つて髪の上に鉛筆を走らせるもの。みんなが前途の希望に燃え立つて居るのだ。やがて彼等の間からひそひそした相談が洩れる。

「京城ー上海ー東京」「・・・・・・・・」・・・・・・・・・。

彼はぼんやりとこんな有様を画いて見た。そして自分自身の惨めさをそれに比べて見た。

「どうにかしなくてはいけないのだ。とにかく。」

明確に示されてはいないが、趙はこれから抗日運動に加わることが予想される。被支配者でありながら、家族と生活のために支配者側に立たざるを得ない彼の矛盾が、免職によって被支配者としての現実を獲得した途端、新たな行動を示していくのである。現実を認識し、独立運動に関わる朝鮮人の造形は、以後の「虎狩」の趙大煥や「北方行」の権泰生からも窺える。

一方、もう一人の主人公である娼婦の金東蓮は、植民地の最下層に置かれ、悲惨な生活を余儀なくされている人物である。彼女は趙巡査のように最初から現実の矛盾を感じていたのではなく、自分の不幸がどこに起因するかもわからない人物である。その彼女が、客の一人から東京の震災のことや朝鮮人虐殺事件のことを聞き知り、夫が日本人に殺されたに違いないと思った瞬間、その現実に怒り狂ってしまう。

ーみんな知つているかい？地震のことを。（中略）

ーそれでね、奴等はみんなで、それを隠して居るんだよ。ほんとに奴等は。

さらに、彼女は捕まえに来た巡査に武者振りつきながら叫んで、

ー何だ、お前だつて、同じ朝鮮人のくせに、お前だつて、お前だつて・・・

ほかにも、作品では朝鮮のこういう悲惨な状況が、他の登場人物を通しても如実に描き出されている。毎日アヘン注射をうつ「淫売婦」、「いざりの乞食」、石造建築の陰で寝ころんでいる「チゲの群」などがそれである。これらの光景は中島敦が朝鮮で目撃した植民地の実態であっただろう。その悲惨さは作品のなかで次のように纏められている。

毎朝、数人の行き倒れが南大門の下に見出された。彼等のある者は手を伸ばして門壁の枯れ切つた蔦の蔓をつかんだまま死んで居た。

ある者は紫色の斑点のついた顔をあふむけて、眠そうに倒れて居た。

さらに、

一九二三年。冬が汚なく凍つて居た。

凡てが汚なかつた。そして汚ない侭に凍りついて居た。

こういう朝鮮の悲惨な状況は、「虎狩」が佳作に選ばれた一九三四年、「中央公論」臨時創刊の「論文」部門の当選作である柳基斗の「朝鮮問題の行方」という一文からよく窺うことができる(2)。氏は朝鮮の工業、農業の疲弊に言及しながら、「工業過程にある朝鮮は日本資本の進出」により「朝鮮手工業者、家内工業者等はその職を奪われ失業戦線へ追い出された」と指摘し、また、農業の惨状をいうところでは、「その結果原始的農業技術を唯一の武器とする朝鮮土着民は、最早や競争する勇気すら持たない屍として存在するに過ぎないのだ。」と述べている。娼婦、チゲ（苦力）、死んでいく乞食の群れなどはこのような社会状況から生まれたものであろう。また、作品では、ほとんどの朝鮮人が定職を持っていない失業者に近い状態であるが、これを同論文の「同化政策の帰結」を論じるところからみると、

朝鮮に於ける官吏養成所の如き感がある官立専門学校が事実上（伏字）して居るのであるから、官吏任用に於いても、日本人に優先権があるのは当然の帰結であろう。例えば人情風俗に通じて居る筈の朝鮮人警官が優遇されず、（云々）(3)

「巡査の居る風景」の趙教英は、まさにそういう「優遇され」ない警官の象徴的な人物であろう。娼婦はさることながら、支配者の側で働いている巡査の趙教英でさえ、ほとんど優遇されることはなかったのである。彼は総督暗殺を図った青年を捕らえたり、路に迷う日本人紳士を親切に案内するなどの真面目な働きぶりをみせるが、日本人の課長と衝突して、いとも簡単にクビになる。当時、日本人巡査の任免権は中央の警察講習所所長にあったが、朝鮮人巡査の場合は、給料も日本人巡査の半分くらいで、その任免権は各道知事や各警察署長にもあったので、職の保障はあまりできなかった(4)。さらに、朝鮮人巡査の場合は、ほとんどを巡査補という日雇い職で採用したので、いつでも解雇が簡単にできたのである。作品での趙は署長に呼ばれて「日割の給料」をもらって首になるが、それが彼が巡査補の身分であったことを示すものであろう。また、趙の免職のきっかけになる朝鮮人学生と日本人学生の喧嘩は、当時頻繁に起こった事件で、全国的な抵抗に広がる場合もしばしばあった。この作品が書かれた前年の一九二八年から光州地域よりくすぶった学生運動は、一九二九年十月、日本人学生と朝鮮人学生との列車の中での喧嘩事件をきっかけに光州学生運動に発展し、ついに全国的な反日運動に広がる一大事件になった。作品の出ている「K中学校」は、中島が通っていた京城中学校だと思われ、中島もこうした事件を直接経験したに違いない。

一方、総督の暗殺を謀る朝鮮人青年の像は、一九一九年九月二日、南大門駅前

で、新しく赴任した斎藤実総督一行に爆弾を投げつけた姜宇奎の行動が下敷きになっている。万歳事件がきっかけとなって、以前の武断政治から文化政治を標榜して斎藤総督が赴任したのは、中島が龍山小学校に編入する一年前であった。中島はこういう話を朝鮮に着いてから聞いたと思われる。「一九二三年の一つのスケッチ」という作品の副題は、一九二三年に限って描かれたものではなく、中島の朝鮮でのすべての認識と見聞がもとになっているといえる。

以上、みてきたように、「巡査の居る風景」での朝鮮人は、ほとんど植民地時代の最底辺に置かれて、悲惨な暮らしを余儀なくされている人物たちである。そして、彼らは、趙教英と金東蓮によって代表されるように、男性と女性の別によって二つの典型的なタイプをなしている。抗日青年と娼婦がそれである。独立運動に加わることになるであろう趙教英、二階屋の一室で密議を謀る同士たち、総督暗殺を図った青年、バスの中で差別語に強く抗議する青年などのように、そのほとんどが反日、抗日運動に関わっている人物として登場している。一方、女性の場合は、金東蓮と彼女の友達の福美のように、いずれも娼婦である。この抗日青年と娼婦という人物造形は、「巡査の居る風景」以降にも一貫した朝鮮人像として登場している。

3　「プウルの傍で」

「プウルの傍で」は、「巡査の居る風景」に引き続いて中島敦の朝鮮での記憶が綴られており、また、作品の中には同じく朝鮮人娼婦が登場する。ここでの朝鮮人娼婦は、「巡査の居る風景」でみたように、社会現実を批判する存在ではなく、むしろ日本人少年の自己探求の対象として扱われているが、その背景には、当時の朝鮮の悲惨な現実の一面が窺われる。

作品は作家の分身とみなされる三造が、母校の京城中学校のプウルの中で、過去のさまざまな記憶を思い出すかたちで構成されている。その記憶のおもな部分が朝鮮での生活であり、またそこにおける朝鮮人娼婦とのエピソードである。山崎良幸によれば、「プウルの傍で」は、一九三二年の夏の終わり頃、中島が京城の氏の下宿を訪れた夜、「「付いて来るな」と言って」「色町に行った」体験が元になっているらしい(5)。しかし、それはともかく、「プウルの傍で」では、朝鮮人娼婦が群れをなし、しかもその個別性さえ失って登場している。

暗い路地にはひつた。低い土造の朝鮮家屋の門毎に、真白に塗立てた女達が四五人づつ立つてゐた。彼女達はすべて朝鮮人であつた。そこらあたりの軒燈は、みな、古風な青い瓦斯燈を使つたゐた。その白い光の下で、紅だの、緑だの、

黄色だの、さまざまな彼女達の下袴の色が、ちらちらと目に映つてくるだけで、その一人々々の顔は、まるで、彼には弁別できなかつた。

女達は二人を見ると、不慣れな日本語で呼びかけた。「アガンナサイ、アンタ。」とか、ただ「アンタ、アンタ。」とか、時々は「ホントニ、イロオトコダネ。」とか、そんな片言であった。

その後、三造は、「小柄で」「まだ子供だろう」と思われる娼婦の「何の飾りもな」い部屋に案内されることになるが、そこで彼はサン・ピエールの恋愛小説「ポウルとヴィルジニイ」を読むばかりで夜を明かしてしまう。そして、後日、この事件が上級生にばれて、学校の後ろの「崇政殿」に連れていかれて散々殴られることになる。

このように、作品では複数の娼婦が出ているが、当時のソウルの色町といえば、新町遊廓（今日の忠武路付近）が最もにぎわっていた。ソウルの遊廓（公娼）は、日露戦争のさなかの一九〇四年六月、日本居留民団が居留地に造った新町遊廓がその最初で、それは日本人娼婦による日本人専用のものであった。以来新町遊廓は、ソウル各地の大麻窟（私娼、「巡査の居る風景」には、毎日注射を打っている福美という娼婦が登場する）などをその周辺に取り入れることで急速に発展した。さらに、一九一九年には、市内に散在している私娼を一掃するため、これらを集めて新町に集団移住させた。これが新町の朝鮮人遊廓である東新地を形成することになる。一方、大和新地と呼ばれた西の地区は日本人の新町遊廓組合によってそれぞれ運営され、日本人が経営し、娼婦も日本人であったという(6)。作品で三造が訪れた朝鮮人遊廓は、具体的には示されてないが、場所とその雰囲気から新町の朝鮮人遊廓のように思われる。一方、日本の朝鮮進出と共に始まった公娼制度は、植民地時代に入ってから制度として定着し、数多くの娼婦を量産することになる。その背景には、制度による倫理感の低下と経済的な困窮など、植民地に共通する娼婦を量産するシステムがあったと思われる。当時流行った民謡には、そういう状況がよく現れている。

アリラン、アリラン、アラリヨ
アリラン坂を越えて行く、
田畑は自動車の道となり
娘はカルボ（女郎）に売られ行く(7)

また、田中英光の「酔いどれ船」には、歌詞を変えている「アリラン峠」の歌がいくつか紹介されているが、そこには、

アリラン、アリラン、アラリヨ
わたしの肉体、ゴムではない。
そんなにいくつもぬきさしすれば、
燃えます溶けます腰が腐る　(8)

いずれの歌も、娼婦になっていく女性を歌ったもので、ほかには選択の余地がない、閉鎖的な時代の朝鮮人像がよく窺われる。「巡査の居る風景」の金東蓮や福美、「プウルの傍で」の色町にうろつく娼婦たちも、こういう時代を反映するものであろう。また、このような朝鮮の娼婦たちの登場自体は、植民地の支配と被支配の構造がより一層浮き彫りにするものでもあろう。支配と被支配の構造が男性による女性の性の支配として、それぞれが日本と朝鮮としても喩えられるからである。

一方、作品には三造が殴られる場所としての「崇政殿」についての描写があるが、そこには、

学校の裏には昔の宮殿の趾が残つてゐた。黄色い塗のはげた、高い屋根の下に「崇政殿」と書いた額が正面を向いてゐた。屋根の峰には鳳凰だの、獅子だの、奇怪な形をした瓦が並んでゐた。中には、いつも、学校の、こはれた椅子や机が置かれてあつた。

というふうに、朝鮮時代の王宮の一つである慶熙宮の建物が京城中学校の倉庫になり果てた事実が記されている。こういう模様は、中島敦と同期生であった湯浅克衛の長編小説『遥なる地平』のなかでも窺えることで、「丹青はもう剥げ落ちて、殿は古淡な色に沈んで」いた宮殿の石畳の上に立たされ、先輩によって「馬賊の歌」を声が涸れるまで歌わされた記憶が述べられている(9)。

このように、「プウルの傍ら」では、朝鮮の現実が自己探求のテーマのなかで、断片的な素材として扱っているが、娼婦達がうろつく淫売窟の路地の風景などは、以前の「巡査の居る風景」に引き続く朝鮮の実状であっただろう。

4　「虎狩」

中島の朝鮮での一番早い時期の記憶が書かれている「虎狩」は、一人の朝鮮人少年との出会いから始まる。日本人少年の＜私＞は、京城の龍山小学校に転入してまもなく、いやなかたちの喧嘩がきっかけになり、朝鮮人少年の趙と付き合う

ことになる。そして、その＜私＞の視線を通して朝鮮の実態がしだいに浮き彫りにされている。

その時彼は自分の名前が趙大煥であることを私に告げた。名前をいはれた時、私は思わず聞き返した。朝鮮に来たくせに、自分と同じ級に半島人がゐるといふことは、全く考へてもゐなかつたし、それに又その少年の様子がどう見ても半島人とは思へなかつたからだ。何度か聞き返して、彼の名がどうしても趙であることを知つた時、私はくどくど聞き返して悪いことをしたと思つた。

朝鮮という新しい風土のなかで、＜私＞が最初に直面したのは、今までとは違う種類の人間であった。「どうしても趙大煥であること」を認めざるを得なくなったとき、その＜名＞の意識化によってはじめて、自分と違う人間の存在、つまり、民族という概念が芽生えてくるのである。発表年代は先になるが、「巡査の居る風景」「プウルの傍で」で描かれている朝鮮の現実は、こういう民族という認識を土台にしてはじめて描き出されたものといえる。しかし、「虎狩」の趙大煥は、「巡査の居る風景」での巡査や娼婦のように、強い民族意識を表面に持ち出すのではなく、できるだけそれを表面に出さないように努めている人物である。日本人の社会のなかで生きている趙大煥にとって、民族というのはどうしようもない劣等感をもたらすもので、それによって周りの日本人社会から彼はいつも疎外されているからである。その疎外と劣等感が、転校生として同じく疎外されている＜私＞に興味をもつ理由であるが、喧嘩の折りには、「喧嘩をして勝ったためしがない」＜私＞にも簡単に負けてしまうほど、さらなる劣等感にとらわれている人物である。しかし、朝鮮人社会では、虎狩りの時に倒れている同胞の勢子を足で蹴返しているように、乱暴な支配者でもある。その点、彼にとって民族という概念は、差別をもたらすなによりも不愉快なもので、できれば避けたいものである。彼は表面的にはそれに拘泥しない態度を取ったりするが、内心では強くそれを意識している人物である。

現に自ら進んで私にその名を名乗つた所から見ても、彼がそれを気に掛けていないことは解ると私は考へた。併し実際は、これは、私の思ひ違ひであつたことが解つた。趙は実は此の点を―　自分が半島人であるといふことよりも、自分の友人達がそのことを何時も意識して、恩恵的に自分と遊んでくれてゐるのだ、といふことを非常に気にしてゐたのだ。

朝鮮人であることを非常に気にしているからこそ、彼は自分が持っている民族

的な要素をできるだけ無化し、またそういう概念からも逃げようとする。「日本語が非常に巧み」だったこと、「植民地あたりの日本の少年達が聞いたこともないような江戸前の言葉さえ知っていた」のも、そういう努力の結果のように思われる。趙の屈折した心情は、本文の次のような部分からも窺える。

彼の母親は内地人と皆が云つてゐた。私はそれを彼の口から親しく聞いたやうな気もするが、或ひは私自身が自分で勝手にさう考へて、きめこんでゐただけかも知れぬ。あれだけ親しく付合つてゐながら、つひぞ私は彼のお母さんを見たことがなかつた。

趙の母親が日本人であれば、趙は日韓混血児ということになる。しかし、母親が日本人だとすれば、趙はなぜ＜私＞に母親を紹介しなかったか、一つの疑問である。朝鮮人であることを非常に気にしている趙であるならば、日本人の母親を紹介するのは、民族意識を無化する一つの好材料であったとも思われる。しかし、彼は母親を＜私＞に紹介していない。となると、＜私＞に記憶の曖昧をもたらしたのは、実は趙の嘘によるものとも考えられる。母親は紹介せず、母親が日本人であるかのような嘘をついたため、＜私＞の記憶に曖昧をもたらしたと推測できるからである。「あれだけ親しく付合つてゐながら、つひぞ私は彼のお母さんを見たことがなかつた」のは、そのような事情によるかも知れない。

このような心境による嘘は、植民地や差別を生きる人間にはそう珍しいことではない。たとえば、時代はややくだるが、一九七〇年代に活躍した小説家立原正秋は、自伝的小説「剣ヶ崎」や、その外の自分の出生を語る際、父親は李朝の王族の末裔で、母親は日本人であると言ってきたが(10)、最近の高井有一の調査により、王族とは全く関係ない金氏の人間で、両親共に朝鮮人で、母親は妾であったことが判明した(11)。「虎狩」の趙の心理の底にも、これと似たような、できるだけ民族意識を無化しようとする意図があったように思われる。趙の母親が日本人ではないという可能性は、趙の父親がほとんど日本語が話せないこと、さらに、趙が生まれた年代的な問題がある。たとえ、趙の母親が日本人であるとすれば、作者の分身である＜私＞が龍山小学校に転入したのが一九二〇年であるから、趙の両親が結婚したのは日韓合併以前のことになる。作品で現れる趙の父親の姿と、「日韓合併に功労があった、貴族の子弟だけが、京城中学校入学資格があった」という湯浅克衛の記憶を合わせれば(12)、趙の父親は、両班階級のなかでも相当な身分であったということになる。日韓合併以前の、しかも、高い身分の両班階級の人が、日本人の女性と正式結婚するということは、時代層からするとほとんど考えられないことである。母親が日本人であるということは、ただの「私

自身が自分で勝手にそう考えて、きめこんでいた」ことではなく、民族概念を希薄化しようとする趙の巧みな嘘によるものというのは、このような理由からである。

しかし、もう一つ考えられるのは、趙の母親が日本人ではあるが、正妻ではなく、妾であった可能性である。となると、父親と同居している趙が母親を紹介できない事情が納得できる。また、趙が朝鮮人が通う普通学校ではなく、日本人が通う小学校に通う事情も説明できる。こういう事情は、時代は下るが、一九三七年に発表された湯浅克衛の「棗」の中で紹介されている(13)。「棗」の主人公金太郎は、朝鮮人の父親と日本人の女性の間に生まれた混血児で、すでに父親が正妻を持っていたため、二人の結婚は認められなくなる。そして、金太郎が入学年齢になったとき、小学校に入れようとする母親と普通学校に入れようとする両親の間に大きな喧嘩が起るが、母親の強い意見で、金太郎は日本人の小学校に入れられることになる。つまり、混血児であるから、普通の朝鮮人は入ることのできない小学校に入ることもできたのである。この二作が同時代を扱っていることから、そういう可能性も充分考えられるが、しかし、どちらにしても、趙の屈折した心情をあらわすものであろう。

「虎狩」は、作品が進むに従って、趙の没落を語る話として展開していく。好奇心と享楽主義にかられた二人は、さまざまな冒険的な行動を繰り返すが、虎の死を境にして、異質な存在としての認識を深めていくのである。異質化していく動因は、私が持ち出す民族による弁別意識である。魚を見に行ったとき、＜私＞は、意図的に「日本の金魚だつてあの位はうつくしんだぜ」といって、趙を深く傷つける。また、発火演習の時には、上級生にリンチされ泣き崩れている趙に向かって、「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼をみせてくれたことが、私に満足を与えたのだった。」というふうに、民族的な優越感の立場で、趙を差別化する。＜私＞に類似していたはずの趙は、民族の概念が介在された途端、差別化され、＜私＞との友情も破綻してしまう。一方、趙はそのような民族の概念には強い反発をみせ、集団リンチを受けたおりには、

―強いとか、弱いとかつて、どういうことなんだらう・・・・・なあ。全く。

と叫んで、その後、行方をくらましてしまう。民族意識を無化しようとした趙の意図は、現実の厚い壁に阻まれて崩壊したかのように思われる。自分自身も民族のなかで生きるしかないという自覚と、そうするしかない現実に対する絶望的な叫びといえる。趙はもともと朝鮮人の社会では支配階級の人間であるから、彼の意識には階級による支配、被支配の観念が強くあったといえる。倒れている勢子

を脚で蹴返すことが平気でできたのもそのためであろう。しかし、虎狩りの後に彼が直面するのは、民族による支配、被支配の構造であった。朝鮮の社会では支配者であるが、民族的には悲惨な被支配者の一人であることを認識した趙は、自分の意識を全面的に変えざるを得なくなる。それは自分も被支配者の朝鮮人であるとの自覚であろう。作品のなかには、そういう自覚による変身の姿が次のように示されている。

やがて、彼に関する色々な噂が伝はつて来た。彼がある種の運動の一味に加はつて活躍してゐるといふ噂を一しきり私は聞いた。次には、彼が上海に行つて身を持崩してゐるといふやうな話も—これはやや後になつてではあるが—聞いた。

失踪した趙が独立運動に加わっている様子が窺えられる。趙の変身ぶりは「巡査の居る風景」の趙教英や、北京で独立運動に携わっている「北方行」の権泰山のイメージにも重なる。そして、後日譚として付け加えられた十数年ぶりの東京での再会の場面では、「何かしら油断の出来ない感じ」として〈私〉に迫ってくるのである。最初は民族を越えた友情を試みた趙であるが、それは現実の前に破れた途端、彼はいよいよ変身せざるを得なくなる。その変身が、誇り高い自尊心に象徴される観念の世界から、独立運動という現実の厳しい行動の世界への転化である。そして、このような変身の過程は、後の「山月記」のテーマにもつながるものであるが、それについては次節で詳述する。

5　「北方行」

中島の未完の長編「北方行」には、権泰生という朝鮮人の青年が登場している。北京で新聞記者の仕事をやりながら、裏では抗日運動に携わっている彼も、ほかの朝鮮人同様、植民地支配の犠牲者である。貧しい家で生まれてやっと高等普通学校を卒業した彼は、東京に出奔し、苦労のすえ私立大学にまで通うことになる。しかし、関東大震災の時、家族のすべてが殺され、新たな人生を歩むことになる。

そして、その翌年があの大震災だつた。十九歳の権泰生は、彼の耳で、母親の最後の恐怖の叫びを聞き、彼の目で恐怖と哀願をうかべながら血にまみれた父親の断末魔の顔を見た。それから逃げおくれて、蟻でもつぶすように踏みにじられた四歳になるビツコの妹の姿をも。

彼は自分の抵抗を、「社会の改造なんて僕は考へたことなんかないよ。僕の持ってゐるのは、極く人間的な自然な憎悪と怨恨だけだよ。この復讐したいといふ気持ちが、自然ではないだらうか、人間的でないだらうか。」というように、人間の基本感情に基づいたものと認識している。尊大なイデオロギーや思想に基づいた抵抗ではなく、人間の自然な感情から出発した抵抗である。中島が描く朝鮮人は、その現実認識の違いこそあれ、いずれも民族という抽象的な概念からの反抗ではなく、現実の人間的な当然の要求から行動しているのである。こういう態度は、一九一九年の三・一万歳運動の「独立宣言文」にも書かれた独立の基本方針であって、以来こういう精神は独立運動の基本理念として貫かれてきたものである(14)。中島がこういう事実まで知っていたかどうかについては疑問があるが、とにかく、中島は植民地の的確な観察によって、当時の朝鮮人の実状を見事に捉え、造形したといえる。

一方、「北方行」の権泰生には、巡査の趙教英、「虎狩」の趙大煥などが辿りつく未来像のイメージが重なっている。彼の「極めて背の高い」姿と、「殆ど朝鮮訛の見出されない日本語」などは趙大煥が持っている資質と類似している。また、家を出て東京に出奔し、さらに北京に向かうのは、趙大煥の行方（彼の場合は上海を経て後に東京に現れる）と地理的にほぼ重なっている。巡査の趙教英も自分の行動の場所として京城、上海、東京を思い浮かべている。また、権泰生の家族が大震災の時に殺されるのは、娼婦の金東蓮の境遇と同じである。こういうところから、「北方行」は以前の朝鮮人の造形が総合され、その後日譚のかたちを取っているかのように思われる。

6　むすび

以上、みてきたように、中島敦の作品に出てくる朝鮮人は、いずれも現実に安定できず、植民地時代を浮遊する人間として描かれている。巡査の職を首になって、上海や東京を行くことが予測される「巡査の居る風景」の趙教英、同じく上海や東京をさまようことになる「虎狩」の趙大煥、そして北京で独立運動に関わっている「北方行」の権泰生のように、朝鮮人の青年は、朝鮮を離れて異国をさまよう運命をたどっていくことになる。一方、女の場合は、「巡査の居る風景」の金東蓮や福美、「プウルの傍で」の娼婦たちのように、娼婦として道端に生計をたてている。中島が描く朝鮮人は、このように、男女によって二つの典型的なパターンをなしている。独立運動者と娼婦のことである。男は最終的に独立運動に関わることになるが、女はすべてが娼婦である。独立運動者と娼婦のイメージは、一見して関係ないように思われるが、当時としては非常に密接な結び付きを

もっていた。娼婦には、抗日運動者を保護したり、抗日運動の軍資金を調達したりするイメージが強くあったからである(15)。夫の死に抗議する「巡査の居る風景」の金東蓮の未来像にもそういうイメージが窺える。独立運動者と娼婦は、疲弊した植民地を代表する最も象徴的な人物造形である。男は、「変調アリラン」でいうように、坑夫になるか、さもなければ、国を去って抗日運動に携わるしか道がなかった。女の場合は、娼婦になる以外には現実的にほとんど道が閉ざされていたと思われる。

一方、中島は朝鮮人を造形するにいたって、それぞれ違う現実認識に支えられている人物を違う方法で描き出している。「巡査の居る風景」では、悲惨な現実をスケッチ風に重ねていくことによって巡査と娼婦の造形を明らかにし、「プウルの傍で」では、主人公の自己探求の基本筋の中での朝鮮人娼婦の造形を、「虎狩」では観察者である日本人少年の目を通して、支配、被支配の構造の転倒に直面している朝鮮人を浮き彫りにしている。しかし、このように中島敦が描く朝鮮人は、最終的な「北方行」の権のように人間の自然な感情の当然な要求から行動し、反抗していくのである。幼い時期を朝鮮で過ごした中島敦は、こういう植民地の現実に直面し、プロレタリア文学の全盛時代の影響と習作期の若い正義感も働いて、それらの認識をそのまま作品のなかに盛り込んだであろう。中島敦の描く朝鮮人は、男女ともに植民地時代を浮遊する人間たちである。これらの浮遊する朝鮮人の造形は、的確な朝鮮認識に基づいたもので、中島文学の新たな一面として注目されるべきであろう。

注

(1) 浜川勝彦は「中島文学のスタート・ラインを「斗南先生」「虎狩」とするのが一般である」と指摘しながら、一高時代から「虎狩」までを初期として扱っている。また、勝又浩は「一応「虎狩」を境にして、制作の年代がそこまで(昭和十年ごろ)に入ると思われる作品群を一まとめにして習作期と考えてみたい」と述べており、鷺只雄は「初期の習作ー豊饒な可能性」のなかで、一高時代の作品と「プウルの傍で」「斗南先生」「虎狩」を初期作品の範囲に入れて論究している。

(2) 柳基斗「朝鮮問題の行方」(『中央公論』臨時増刊、一九二〇年四月)

(3) 注(2)と同じ。

(4) 『韓国独立運動史四』(国史編纂委員会、正音文化社、一九六八年、ソウル)に転載されている第七十三回日本帝国議会説明資料によると、昭和十二

年の日本人巡査の給与は、功労加俸、加給、宿舎料という名目で別途に払われ、総額平均七〇・八七円になっており、朝鮮人巡査の場合は本俸の三九・四四円にとどまって、その差は歴然としていた。また、その採用においては、「日本人巡査は警察官講習所長が、朝鮮人巡査は各道知事が採用」し、「朝鮮人巡査においては、道で実施する外、警察署に委任して採用試験を実施」したという。

（5）山崎良幸「中島君を憶う」『中島敦・光と影』田鍋幸信編（有精堂、一九八九年）

（6）娼婦に関する内容は、『ソウル六百年史第四巻』（ソウル特別市、一九八一年）を参照。

（7）湯浅克衛「カンナニ」（『文学評論』、一九三五年四月）からの引用。

（8）田中英光「酔いどれ船」（『田中英光全集二』芳賀書店、一九七〇年）からの引用。なお、「アリラン峠」という民謡は、歌詞の一部分を変えるかたちで当時盛んに流行し、それらの一部が「酔いどれ船」の中に紹介されている。

（9）湯浅克衛『遥なる地平』（東亜公論社、一九四〇年）

（10）立原正秋「剣ヶ崎」（『新潮』、一九六五年四月）

（11）高井有一『立原正秋』（新潮社、一九九一年）を参照。

（12）湯浅克衛「敦と私」（『中島敦研究』筑摩書房、一九七八年）

（13）湯浅克衛「棗」（『中央公論』、一九三七年七月）

（14）「独立宣言文」の公約三章の第一章には、「この運動は、正義、人道、生存、尊栄の為のもので」、「決して排他的感情に逸走すべからず」と明確に運動方針を決めている。

（15）植民地時代の抗日妓生の逸話は数多くある。晋州妓生の山紅は、親日派の李某から現金一万円をもらったが、「妓生にあげるお金があれば、国のために血を流している若者にあげなさい」といって、きっぱり拒絶したという。南道出身の妓生玄山玉は、上海から潜入している愛国志士を匿っていたが、日帝刑事に疑われ、部屋の中を捜索された時、愛国志士をお母さんの布団の中に隠して難を免れたという。ほかにも、愛国志士仁村先生を親日派の朴春琴から守った妓生の話がある。以上、『ソウル六百年史』（第四巻、ソウル特別市、一九八一年）による。

第2節　「虎狩」と〈虎〉の死

1　はじめに

一九二〇年『中央公論』の懸賞募集で選外佳作に選ばれた「虎狩」は、舞台が朝鮮で、朝鮮の虎が作品のおもな素材として登場している。虎が登場する作品は、日本文学には稀にみる例で、氏の代表作といわれる「山月記」にも虎が登場していることから、虎は中島文学にみられる独特な素材といえる。とすれば、作品での虎は一体どのような意味をもつものであろうか。本稿は虎に注目し、虎と登場人物との関連、虎狩の持つ意味などを考察する。

まず、本論に入る前、虎と虎狩をめぐる朝鮮の時代状況を紹介すると、当時の朝鮮では虎が非常に多かったこと、またその被害を防ぐため虎狩が頻繁に行われたということである。たとえば、中島が龍山小学校に転入した翌年の一九二一年から一九二二年の間、虎による大きな事件を調べると、『東亜日報』だけでも十二件ある。さらに、豹と豺（ヌクテ）による被害まで加えるとその数は実に膨大で、その被害を防ぐために警察署は討伐隊を組織して猛獣狩りを行ったほどである(1)。このことから、虎狩は作品の冒頭でいうような、とんでもない「ふざけた」話ではなく、日常的に行われたということを念頭におく必要がある。

2　〈虎〉の像

全七章で構成されている「虎狩」の冒頭は次のように始まる。

私は虎狩の話をしようと思ふ。虎狩といつてもタラスコンの英雄タルタラン氏の獅子狩のやうなふざけたものではない。正真正銘の虎狩だ。場所は朝鮮の、しかも京城から二十里位しか隔たつてゐない山の中、といふと、今時そんな所に虎が出て堪るものかと云つて笑はれさうだが、何しろ今から二十年程前迄は、京城といつても、その近郊東小門外の平山牧場の牛や馬がよく夜中にさらはれて行つたものだ。

「虎狩」の冒頭は、「正真正銘」の虎狩の話をするといって、読者の興味を強く煽り立てる。しかし、作品では、第二章以下からわかるように、ほとんど朝鮮人の友達の話に費やされて、なかなか肝心の虎狩の話は始まらない。そして、第六章になってようやく「正真正銘」の虎狩が始まるが、それさえもあっけなく終わってしまう。つまり、序にあたる第一章を除くと、後の五章は虎とはあまり関

係のない友達の趙の話が延々と述べられている。先行論で「描写のバランスを失して」いるとの評はまさにこれを指摘してのことであろう(2)。つまり、友達の話をするのが目的であるとすれば、第一章から始まった方が作品全体のバランスから考えてもよいということである。また、虎狩の話をするとすれば、趙の話より虎狩の話を中心に持っていったほうがより自然な構成であろう。というと、「虎狩」は単に「描写のバランスを失して」いることになるのであろうか。

作品は「構成乃至構造は偶然ではあり得ず、作者の周到綿密な用意と緻密な計算に基づく」ものであるとすれば(3)、ただの構成上の未熟として済まされるものではない。「虎狩」は一つの明らかな意図によって書かれたとみるべきで、その意図というのは、趙と虎の密接な関係にあったと思われる。たとえば、第二章の書き出しをみると、

さて、虎狩の話の前に、一人の友達のことを話して置かねばならぬ。その友達の名は趙大煥といつた。名前で分るとほり、彼は半島人だった。

第一章の虎の話から急転換するかたちで書かれた第二章は、趙という人物の登場から始まる。これを第二章と虎狩を予告する第一章とを合わせて考えてみよう。まず、第一章は、「私は虎狩の話をしよう思ふ」といって、「場所は朝鮮の」というように小説的空間を設定している。それが第二章になって、「虎狩の話の前に、一人の友達のこと」を話すといって、「名は趙大煥」というように人物を設定する。ここで同じパターンで書かれたこれらの二つの章を、一連の連続した文章として考えてみると、「私は虎狩の話をしようと思ふ。場所は朝鮮、その名は趙大煥」というふうな構成になる。「虎狩」がほとんど趙の話に費やされているのは、このような虎と趙大煥との密接な関係があったからではなかろうか。つまり、虎は趙の比喩的な存在であるということである。とすれば、「虎狩」の全体は趙の話として統一性を保つことになる。「虎狩」が全体から見て「バランスの失して」いるように見えるのは、趙のイメージを自然に虎と一致できるように設定した結果であろう。虎が趙の比喩的な存在であるとすれば、虎の意味は「虎狩」のテーマとも深く関わっているといえる。まず、虎についての次のようなエピソードの紹介から見てみよう。

東小門外の駐在所で、或る巡査が一人机に向つてゐると、急に恐ろしい音を立ててガリガリと入口の硝子戸を引掻くものがある。びつくりして眼をあげると、それが、何と驚いたことに、虎だつたといふ。虎が一しかも二匹で、後肢で立上り、前肢の爪で、しきりにガリガリやつてゐたのだ。巡査は顔色を失ひ、早

速部屋の中にあつた丸太棒を閂の代りに扉にあてがつたり、ありつけの椅子や卓子を扉の内側に積み重ねて入口のつつかひ棒にしたりして、自身は佩刀を抜いて身構えたまま生きた心地もなくぶるぶる顫へてゐた。が、虎共は一時間ほど巡査の胆を冷させたのち、やつと諦めて何処かへ行つて了つた、といふのである。

日本人巡査を驚かす虎の像は植民地時代の朝鮮民間説話のなかでよく登場する話である。支配者を象徴する「日本人巡査」を脅かす虎の話は、植民地という厳しい現実におかれた朝鮮人の心を慰めるものとして広がり、また、それ自体が心理的な抵抗でもなり得えたからである。いうまでもなく、虎は朝鮮を象徴する動物である。しかし、植民地時代の日本人が持っている虎のイメージといえば、ほとんどが加藤清正が朝鮮で虎を退治したようなものである。それは、教科書という学校教育のなかで広く宣伝され、ついに、朝鮮人生徒用の教科書にも掲載されるまでになる(4)。巡査を驚かす虎は、無礼な支配者である日本を戒めるという、民衆の期待が込められた反射的心理の発露といえよう。そして、このエピソードが終ってまもなく紹介される趙も、こういう期待感が込められた人物であったろう。しかし、虎狩を前後にして趙はさまざまな変容をみせることになる。そういう趙の変容には虎が深く関わっている。それを朝鮮の虎の性質から考察してみよう。

昔から朝鮮では、虎は二つのイメージをもつ動物として認識されて来た。一つは、人間に害を与える残虐で慈悲心のない、退治すべきただの猛獣に過ぎないとの現実的な見解である。もう一つは、長い間韓国人の心情のなかで神聖化されてきた虎像である。その虎は自尊心と正義心が強い動物として認識され、韓国の説話などでは数え切れないほどの虎の恩返しや、虎の復讐というような話をつくり上げている。こういう虎像は、伝統的な山神思想とも習合し、いつも民衆の味方になって支配者を戒める存在として、民衆から愛されてきた虎像である。燕巌朴趾源の代表作「虎叱」からみると(5)、

北郭先生　大驚遁逃　恐人之識己也　以股加頸　鬼舞鬼笑　出門而□跑　乃陷野窖　穢滿其中　攀援出首而望　有虎當径　虎顰蹙嘔哇　掩鼻左首而噫曰　儒臭矣　北郭先生　頓首匍匐而前　三拜以跪　仰首而言曰　虎之德其至矣乎　大人效其變　帝王學其歩　人子法其孝　將師取其威　名並神龍　一風一雲　下土賤民敢在下風　虎叱曰毋近前　曩也　吾聞之　儒者諛也　果然

北郭先生、大驚して遁逃す。人の己を識るを恐るるや、股を以て頸に加へ、鬼

舞鬼笑して門を出でて*跑る。乃ち野窖に陥るに穢れ其の中に満つ。援けを攀げて首を出だして望むに、虎有りて當に径すべし。虎顰蹙して嘔哇し、鼻を掩ひ首を左にして噫して曰はく、「儒は臭し」。北郭先生、頓首し匍匐して前み、三拜して以て跪く。首を仰げて言ひて曰はく、「虎の徳其の至るや。大人は其の變を效ひ、帝王は其の歩を學び、人子は其の孝を法り、將師は其の威を取り、名は神龍に並ぶ。一風一雲、下土の賤民にして敢へて下風に在る。」虎叱りて曰はく、「近きに前む毋れ。襲なり。吾これを聞くに儒は訣なり。果して然り。」

支配階級の儒者（両班階級）を民衆の立場に立って懲らしめる典型的な朝鮮の虎像である。趙と虎狩にまつわるエピソードは、こういう朝鮮本来の意味をもつ虎像から出発するもので、退治すべき猛獣と、弱者や被支配者の味方としての虎像であろう。しかし、日本人である＜私＞の認識はそこまではいたっていない。＜私＞にとって虎狩というのは、加藤清正が虎を退治するようなものである。二人の友情の破綻をもたらす虎狩は、このようなそれぞれ違う＜虎像＞をすでに内在していたのである。そして、虎の死をむかえたとき、虎の意味が現実として趙の没落のかたちで現れることになる。倒れている勢子を足で荒々しく蹴返している趙から私が発見したのは、「終りを全うしない相」である。それは虎狩の時に殺された、ただの猛獣の虎と変わらない死に方を意味するであろう。日本人社会での趙は、被支配者の味方という虎像をもつことができるが、朝鮮人の社会のなかに入った途端、彼は猛獣の虎のような残虐な支配者になってしまう。それが趙の没落を予見するものになり、ついに発火演習の悲惨な結末をむかえるのである。

一方、＜私＞はいよいよ虎狩という現実をむかえて、動物園で初めて本物の虎と対面することになる。

この獣は私に一瞥さへ與えなかつたのだ。私は、侮辱を受けたやうな気がして、最後に、獣の唸るやうな声を立てて、彼の注意を惹かうと試みた。併し無駄だつた。彼は、その細く閉ぢた眼をあけようとさへしなかつた。

動物園で見た虎は、＜私＞に一瞥も与えない傲慢な自尊心の持主で、虎の自尊心によって＜私＞は侮辱感を感じるのである。このような侮辱感は、転校まもなくの趙との喧嘩の折に、組み敷かれた趙から「何かしら侮辱を感じて」いた場面と重なっている。傲慢な自尊心の持主で、私に「侮辱感」を感じさせる点においては、趙と虎は非常に類似し、またそれが、後で趙の没落と虎の死として現れるのである。そして、「虎狩」では虎を人間の性格、とくに自尊心の象徴として捉えているが、これは中島敦の代表作「山月記」の中でもみられる。

己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙悲とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に當るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だったのだ。

李徴という人間の変身として登場する虎は、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」の象徴としてあらわれている。「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という矛盾した心理は、被支配者でありながら、朝鮮人の社会では支配者にもなる趙の立場とも類似しているといえる。こういう矛盾した心理は、また、対立する二つの虎像としても現れ、その結果、趙は没落の方向にむかう。さらに、趙の虎像は＜私＞の虎像とも対立し、友情も破綻してしまうのである。

ここで一つ指摘しておきたいことは、「山月記」での虎は、朝鮮の虎からの影響が大きいということである。周知のように、「山月記」は、中国の「人虎伝」をモチーフにして書かれたものであるが、その「山月」というのは朝鮮の虎を連想させる言葉である。昔から朝鮮では虎の絵が多く、とくにそのなかでも、薮の中で虎が月に向かって吠える図を「山月」という言葉でよく表現する(6)。同じような場面が「山月記」からも窺えるが、このような場面の設定は、朝鮮で見た虎の図から影響されたように思われる。

さて、「虎狩」では、ついに虎は殺される。そして高い自尊心が挫かれた趙も姿を消してしまう。虎の死をもたらす虎狩は趙の没落を予告するもので、趙の没落は結局のところ、虎に変身する李徴と同じ意味での変身になるのである。その変身の部分が後日に付け加えられたと思われる第七章の後日譚である。

3　＜虎狩＞の意味

虎と趙が密接な関係を持っているとすれば、「虎狩」の意味は新たに展開できる。まず、虎狩は趙を＜狩る（自己探求）＞ものとして基本的に解釈できる。先行研究が「自我追求」の像としての趙の存在を捉えていることからも、こういう関連は説明できるであろう。趙を＜狩る＞ということは、自分自身を狩る、つまり、＜私＞の「自己探求」にもつながる。虎狩は趙を＜狩る（自己探求）＞とともに、＜私＞を＜狩る（自己探求）＞ことを象徴的に示す言葉といえよう。以下、自己探求の像としての虎狩を作品の時間的な順序から考察してみよう。

趙との出会いは、＜私＞が「五年の二学期」に内地から朝鮮の龍山小学校に転校して「二三日経ったある日」、読み方の時間に「児島高徳」の部分を読まされ、

発音のことで皆から恥をかかされたことがきっかけである。「五年の二学期」に龍山小学校に転校したというのは、そのまま中島敦自身の経験であるが、「児島高徳」を読まされたというところは、「児島高徳」が当時の尋常小学読本の6年次の教科書に出てくることから(7)、転校して「二三日経ったある日」というところは事実とは少し違う。あくまでも一つの事実で、作品としては問題にならない。

ともかく、作品での＜私＞は、「すつかり厭な気持になつて了つて」教室を抜け出し、運動場の隅で唾ばかり吐いていたが、そこに趙が現れ、「ヤアイ、恥づかしいもんだから、むやみと唾ばかり吐いてやがる」と＜私＞をからかう。日本から来たばかりの＜私＞に接近する趙の姿から、彼が強い好奇心の持主であることがわかる。また、＜私＞の心理を素早く見抜いてしまう鋭く敏感な神経の持主でもある。こういう特徴は後で明らかになるように＜私＞の特徴でもある。とりあえず、趙によって自分の心が見抜かれた恥辱で、＜私＞は負けることを承知して喧嘩を始めることになる。

苦もなく私は彼を組敷くことが出来た。私は内心やや驚きながらも、まだ心を許す余裕はなく、夢中で目をつぶつたまま相手の胸ぐらを小突きまはしてゐた。が、やがて、あまり相手が無抵抗なのに気がついて、ひよいと目をあけて見ると、私の手の下から相手の細い目が、まじめなのか笑つてゐるのか解らない狡さうな表情を浮かべて見上げてゐる。私はふと何かしら侮辱を感じて急に手を緩めると、すぐに立上つて彼から離れた。（中略）私は却つて此方が負けでもしたやうな間の悪さを覚えて、妙な気持で教室に帰つて行つた。

この喧嘩によって二人の交友が始まるが、趙が＜私＞に近づいて来たのは、ただの好奇心だけではなく、＜私＞のなかに自分と共通したものを見出したからであろう。龍山小学校で「すつかり厭な気持」になっていた＜私＞と、学校で数少ない朝鮮人である趙は、お互いに疎外された共通点をもつ人間である。それ故、最初は趙が近づいて来たし、＜私＞も厭なかたちの喧嘩の後にも趙と関係を深めていくことになるのである。また、二人は強い自尊心の持主でありながら、実は弱虫で傷つきやすく、繊細敏感な神経は生への好奇心に満ちているという、性格的にも類似している。鷺只雄はこれを指摘して、

この小説は語り手である＜私＞の視点から趙が描かれるのみで、＜私＞なる人物の性格・心性はあまり明瞭な輪郭をもたないのであるが、それはつまるところ、多くの趙を語ることが同時に＜私＞を語ることにもなるという隠微なかたち故の必然である。(8)

また、木村一信は、

主として＜趙＞の側の表現を通してなのであるが、＜趙＞の輪郭をなぞることがとりもなおさず＜私＞をも表出する作用をなす。(9)

このような類似した人物の造形をとおして自己を表出していく傾向は、すでに「斗南先生」「プウルの傍で」から始まっているが、とにかく、趙と＜私＞とは、お互い「生の不思議」、「奇怪にして魅力に富める人生の多くの事実」への好奇心があるが故に結ばれやすく、また自尊心がつよく、繊細にして傷つきやすい心持ちの所有者であるが故に破綻しやすいのである。

最初の喧嘩があってから彼らの友情は順調に進み、やがて同じ学校の中学生になって、「髪の豊かな眼きれの長く美しい娘」に思いを寄せたりする。また、好奇心に駆られた二人は、「生の不思議」、「奇怪にして魅力に富める人生の多くの事実」に没入していくのである。「貪婪な好奇心を燃やしている」二人は意気投合してさまざまな探検に眼を光らせる。時間的に次にくる虎狩は、彼らの「奇怪にして魅力に富める」世界を発見するという、より刺激的な事件であったといえる。不思議な世界への好奇心の充足を求める二人の友情は、この上なく発展し、虎狩は彼らのこのような友情の延長線で行われる。しかし、虎狩が終わってから二人の友情は破綻してしまう。虎が死をむかえた途端、＜私＞は以前とは違う新たな趙の姿に直面する。それは、虎狩のとき、虎に驚いて雪の上に倒れた一人の勢子に対する趙の態度から始まる。

彼は、その気を失つてゐる男の所へ来ると、足で荒々しく其の身体を蹴返して見ながら私に言ふのだ。

ーチヨツ！　怪我もしてゐないー

それが決して冗談に言つてゐるのではなく、いかにも此の男が無事なのを口惜しがる、（中略）ふと、私は彼等の中を流れてゐる此の地の豪族の血を見たやうに思つた。そして趙大換が気を失した男をいまいましさうに見下ろしてゐる、その眼と眼のあたりに漂つてゐる刻薄な表情を眺めながら、私は、いつか講談か何かで讀んだことのある「終りを全うしない相」とは、かういふのを指すのではないか、考へたことだつた。

＜私＞は、勢子を足で荒々しく蹴返している趙と、それを止めようとしない彼の父親を見て、趙のなかに流れている「この地の豪族の血」を感じとって驚く。

弱虫で傷つきやすい心持ちの所有者で、好奇心にかられてさまざまな奇怪な行動を繰り返してきた今までの趙とは全く違う一面である。趙は日本人が支配する社会では弱虫で傷つきやすい性格の人間であるが、朝鮮人の社会では凶暴な支配者として君臨していたのである。＜私＞は趙の新たな姿から「刻薄な表情」と「いつか講談か何かで読んだことのある「終りを全うしない相」」を確認したのである。虎狩の前までの二人は、「生の不思議」、「奇怪にして魅力に富める人生」を探検し続けてきたが、それとは似ても似付かない新たな趙の発見は、彼らの友情を根本から壊すものになる。そして、趙の「刻薄な表情」こそもっとも現実的なもので、今まで二人が追求してきた耽美的な人生への興味とは正反対のものである。虎狩が終わった時点でみせた趙の「刻薄な表情」という異質感から、＜私＞は類似性としての＜趙＞の存在を失ってしまうのである。自我追求の像としての趙の消滅である。そして、虎の死とともに、趙との友情も変調し（ていく）一方、虎に象徴される趙もついに没落の方向にむかうのである。

さて、ここで全体を時間的順序からみよう。時間的な設定のない第一章を除いて時間的順序をならべてみると、第二章、第三章、第六章、第四章、第五章、第七章のようになって、第六章だけが時間的順序から逸脱している。これは一番肝心な虎狩の話を後の方に回して読者の感動を高めたと単純に考えられる。しかし、それよりも、今まで指摘したように、趙の存在に＜虎＞を重ねたとすれば、「虎狩」は全体として趙の話になる。趙を語る時の話の順序として最後の方にくるのは、当然＜私＞と趙との友情の没落のことである。虎狩の事件こそ、自己探求へむけての類似した人物としての趙の完全な消滅である。趙の失踪の原因になる第5章の発火演習の事件は表面的な没落であり、自我追求の像としての趙の消滅は虎狩によってなされたといえよう。それが時間的順序を逸脱して虎狩を最後の記憶に持ってきた真の理由ではないだろうか。こういうことは、十数年ぶりに再会した趙を思い出す時の＜私＞の記憶にもそのまま影響して現れる。

後日譚として語られる再会の場面は、以前の＜私＞の予測を確認する作業でもある。十五、六年ぶりに本郷の古本屋通りで＜私＞は「田舎者の顔と掏摸の顔とを一緒にしたやうな顔」の男と出会ったが、彼が趙であることがすぐには気付かない。彼は＜私＞に煙草を要求し、それを受け取ってから、自分が求めているのは煙草ではなく、燐寸であることに気づいて、その間違いについて次のように説明する。

感覚とか感情ならば、うすれることはあつても混同することはないのだが、言葉や文字の記憶は正確なかはりに、どうかすると、とんでもない別の物に化けてゐることがある。

趙の話は自分の間違いを語っているが、同時に＜私＞の趙への記憶がどのようなかたちで残っているかを問いただす役割もする。つまり、趙とのさまざまな過去の出来事のなか、どの部分が「感覚」や「感情」として、現在の＜私＞に残っているかが問われる箇所である。彼の話を聞いた＜私＞の記憶はすぐよみがえる。

ーおお、それが彼以外の誰だらうか。虎に殺され損つた勢子を足で蹴返してい
まいましげに見下した彼以外の誰の眼付きだらうか。その瞬間、一時に私は、
虎狩や熱帯魚や発火事件などをごたごたと思ひ浮かべながら、これが彼である
ことを見出すのに、どうしてこんなに手間を取つたらうか、と自分ながら呆れ
てしまつた。

趙と出会った最初の時点では、＜私＞は趙の名前を思い出していない。彼の名前よりも、「虎に殺され損つた勢子を足で蹴返して」いる趙の姿を一番鮮明に思い出したのである。なぜ、虎狩でみせた趙の行動がそんなにも強く＜私＞に残っていたのであろうか。第五章の発火事件でみせた趙の悲惨な最後もつよい印象を与えるものである。しかし、＜私＞の「感覚」と「感情」として一番鮮明に残っているのは、虎狩でみせた趙の姿である。虎狩の時にみせた趙の「眼と眼の間あたりに漂つてゐる刻薄な表情」は、十五、六年後にも「お人良しと猜疑とのまざりあつた其の眼付」として重なり、それはそのまま「虎に殺され損つた勢子を足で蹴返していまいましげに見下した彼以外の誰の眼付だらうか」というふうによみがえるのである。また、虎狩で＜私＞が予告した「終りを全うしない相」は、第七章の中で、「有為変転に富む人生」を思わせる彼の異様な風体からもある程度実現されているように思われる。虎狩の事件は、後日譚として描かれた第七章の趙のイメージの前提になっており、それは趙の没落イメージである。時間的順序を無視して第五章を話の最後に持ってきたのは、趙の没落を最後に語るという必然性からではなかろうか。

時間的な順序からは虎狩のすぐ後になる第四章は、変化した＜私＞と趙との関係が示されている。順調であった友情が変調のきざしをみせるのである。その背景に虎狩の事件があったことはいうまでもない。

ある日、趙は「異国的な美」を誇る熱帯魚を見てきた感動を話しながら、＜私＞を三越ギャラリに誘う。そして、彼と一緒に行った＜私＞は熱帯魚を見て一通り感動はするが、「趙の感激の仕方が、あまり仰々しすぎる」ことと「彼の感動には多くの誇張が含まれてゐる」ことに気づき、「その誇張を挫いてやらう」と冷たくいう。

ーそりや綺麗でないことはないけれど、だけど、日本の金魚だつてあの位は美しいんだぜ。ー

＜私＞はわざと「日本の金魚」といって、趙の自尊心をこのうえなく傷つけてしまう。自尊心が高く、傷つき易く、しかも自分が朝鮮人であることを非常に気にしているが故に、趙の屈辱は計り知れないものであっただろう。順調であった二人の友情に破綻のきざしをもたらしたのは、＜私＞の方からである。＜私＞に何かの変化があったと推測できるが、それは虎狩で確認した趙の新たな姿、つまり自分とは違う人間であるという、類似性の喪失がもたらしたものであろう。

趙の思い出として最後に語られるのは、発火演習の夜の出来事である。日頃から上級生に睨まれていた趙は、野営の夜に上級生から集団リンチを受けることになる。リンチが終わるのを待って趙のところに様子を見に行った＜私＞は、そこで「小さな犬か何かのやう」な趙の姿を発見し、それを「見下したまま」声をかけるのである。この時の＜私＞の姿勢は、虎狩の折に勢子を蹴返す趙の態度に似通っている。

が、それでも私は何かしら心の中で嬉しかつた。あの皮肉屋の、気取屋の趙が、いつもの外出行きをすつかり脱いで、（中略）ー裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼を見せてくれたことが、私に満足を與えたのだ。私達はさうして暫く寒い河原に立つたまま、月に照らされた、對岸の龍山から毒村縣や清涼里へかけての白々とした夜景を眺めてゐた。・・・

断絶した二人の友情は完全に破綻してしまったのである。この事件から数ヶ月後、趙は＜私＞になにも告げずに失踪する。それぞれ違う条件を生きる二人の異質さが最終的に確認されたのである。虎の死で終る虎狩によって類似性を喪失した二人が迎える最終結果である。これは後日譚として付け加えられたと思われる十数年ぶりの再会の時にも、道端で簡単に別れてしまう二人の関係からもう一度確認される。しかし、再会の時の趙は、「何かしら油断の出来ない感じ」として迫ってくる。それに＜私＞の方こそ「馬鹿にされたやうな腹立たしさ」を感じるのである。逞しく変化した趙の姿は、中島の未完の長編小説「北方行」で、朝鮮の独立運動に関わっている権泰山の姿からも窺える。しかし、会ったともいえないような再会を除けば、趙との関係もそれきり断絶してしまう。そして、趙は誇り高い自尊心に象徴される観念の世界から現実の行動の世界へ変化していくのである。当然のように、＜私＞の現実を離れた異国趣味、生の不思議、享楽主義も

虎狩とともに終焉を告げるのである。

注

（1）『東亞日報索引』（一九二〇年―一九二二年）には、「猛獣に依る被害」という項目を設けてその事例を紹介している。一九二一年に起こったおもな事件だけを挙げてみると、

・豊山郡に猛虎、中国女子一人山中で殺され（五月二一日）
・揚州に又復虎害、子供を残虐にかみ殺す（五月二四日）
・猛虎出現、興原地方不安におののく（七月十日）
・智異山で大虎捕獲（七月十六日）
・洪原郡、猛虎出野（九月三月）
・里帰りに同行していた義理の兄、猛虎にかみ殺され（九月十二日）
・京城東大門警察署ヌクテ狩り、管内で三歳の子供が殺されたのを始め、人民の被害少なくなくて（十月二一日）

（2）佐々木充「一高時代の習作―意識と方法と」（『中島の文学』楓風社、一九七六年）
（3）佐々木充『中島敦』（桜楓社、一九六八年）
（4）加藤清正の虎退治の話は、明治二〇年代の初めから教科書に登場し、戦前まで続く。その一部模様は、李淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本』（ほるぷ出版、一九八五年）で確認できる。
（5）朴趾源「虎叱」（李家源訳『熱河日記（上）』大洋書籍、一九七五年）。なお、漢文の書き下し文は筆者によるもの。
（6）金虎根・尹烈秀『朝鮮の虎、The Korean Tiger』（悦和堂、一九八六年）の五〇項に紹介されている虎の絵の中には、「山月」という文字が確認できる。資料一参照。
（7）注（4）に同じ。
（8）鷲只雄「「虎狩」―その享楽主義」（『中島敦論―「狼疾」の方法』有精堂、一九九〇年所収）。鷲只雄は従来の「虎狩」論を三つに分類しながら、「表現は異なるが、通説に言う〈自我追求〉のあらわれを共通して」いると指摘した。
（9）木村一信『中島敦論』（双文出版社、一九八六年）